

第126回 日文研フォーラム



東アジア獅子舞の系譜

—五色獅子を中心に—

Lion Dance in East Asia

—Its Tradition and Genealogy—



李 応 寿

LEE Eung Soo

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

東アジア獅子舞の系譜

—五色獅子を中心に—

Lion Dance in East Asia
—Its Tradition and Genealogy—

● 発表者 ●

李 応 寿
LEE Eung Soo

韓国世宗大学校 副教授

Associate Professor, Sejong University

国際日本文化研究センター 客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



2000年2月8日 (火)

発表者紹介

李 応 寿

LEE Eung Soo

韓国世宗大学校 副教授

国際日本文化研究センター 客員助教授

Associate Professor, Sejong University

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

1978. 2 韓国外国語大学日本語科卒業
1980. 2 韓国外国語大学大学院日本語科修了
1984. 3 東京大学大学院修士課程比較文学比較文化専門課程修了
1987. 3 東京大学大学院博士課程比較文学比較文化専門課程修了
1979. 3～1980. 2 韓国外国語大学日本語科 助手
1987. 9～1988. 2 韓国外国語大学日本語科 非常勤講師
1988. 3～1991. 9 世宗大学校日語日文学科 専任講師
1991.10～1996. 3 世宗大学校日語日文学科 助教授
1996. 4～現在 世宗大学校日語日文学科 副教授
2000. 6～現在 韓国日本学会傘下日本文学会 会長

主な著書・論文

- 1990 民話劇の虚実—『夕鶴』を中心に 『日本学報』25号
1991. 5 『やさしい韓国語講座』 (株語研)
1991. 5 日本の伝統娯楽公演芸術—能・歌舞伎 『展望』5巻 5号
1992 「田楽」考—その展開と比較文化のための試み 『日本文化研究』7
1993. 3 「私の韓日比較文化論」 『展望』第75号
1997.11 「川上新派劇の成立と韓国」 『日本学報』第39輯
1999. 9 「歌舞伎—隈取りの美学」 『日本語ジャーナル』99. 9月号
2000. 3 『新国王』に現れた韓国観
—『アルト・ハイデルベルグ』との比較において
『国際日本文学研究集會会談録 (第23回)』
2000. 8 「数字『八』の秘密」 『アジア遊学』NO.19
2000.10 「玄界灘を渡った川上音二郎」 『日本研究』第22集

はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました李応寿でございます。先ほど篠原初江専門官からお話がありましたように、勝手なテーマを気楽に話してもいいということで、この講演をお引き受けいたしましたところ、今日、この会場にきてみたら、あまりにも沢山の方々がいらつしやつていたので、内心少々戸惑いを感じている次第でございます。

私は、今日この会場に来るため、私が客員として所属している国際日本文化研究センターを昼前に出発しました。天気予報では雪でしたが、外に出てみると、雪こそ降らなかったものの、あいにくの強い風のため、非常に肌寒い一日となっております。このような厳しい寒さのなか、お集まりいただいた皆様に、この場を借りまして改めて厚く御礼申し上げます。

ところで、「寒さも彼岸まで」と言われますとおり、この寒さもお正月が過ぎれば、多少は緩みが出てくるかもしれません。今お正月と言いましたが、実は、今の季節は、陰暦で言えば、ちょうど正月の初めにあたりますね。今の日本は陽暦を使っておりますけれど、日本でも一昔前までは陰暦を使っていました。

この陰暦のお正月というのは、東アジアの多くの国々においては、いろいろな行事が

行われる季節でもあります。その行事のなかの一つに、獅子舞を思い出す方々も多いに違いありません。そこで、今日は皆さんに、獅子舞の話をしてみようかと存じます。

それから、いま私の隣に座っていらつしやる高橋裕一先生は、後ほど稲賀繁美先生からもつと詳しいご紹介があるだろうと思いますが、埼玉にある獅子博物館の館長で、日本の獅子舞の専門家でいらつしやいます。私の不敏な話に、後で、いろんな角度からご指摘をいただくことになっております。もちろん、フロアの皆さんからも「あ、私、子供の時、こんなの、見ましたよ」とか、あるいは「これは、外国人の目で見ているから、違うんじゃないか」とか、いろいろとお話、ご指摘があればと期待しております。

一 獅子のいない地域の獅子舞

さて、今日は「東アジア獅子舞の系譜——五色獅子を中心に」という、やや大げさな題目をつけましたが、実は、私が見てきたいろんな獅子舞のなかに、「五色獅子」とも言うべきものがありました。青黄赤白黒、あるいはそれに近い五つの色でできた獅子のことで、「ごしき」とも、「ごしよく」とも読めるわけですが、読み方はさて置き、この五色獅子というのは、東アジアに広く分布していて、学術的にもとても興味深い獅子舞であります。

実は、獅子は、アジアの東部のなかでは、インドの一部にしか棲息していない動物で、大陸の中国にも、あるいは半島の韓国にも、そして列島の日本にも、獅子が住んでいた記録は、いまだに発見されておられません。この前、ある考古学の先生にこの話をしましたら、「先史時代のものとしては、それらしき骨が発見されたことがありますよ」とコメントして下さったことがありますが、先史時代というのは、記録に残っていない歴史以前の時代なわけですから、ここでは、その問題は論外にします。

とにかく、ヨーロッパなどとは違って、このように獅子の棲息していない東アジアにおいて、獅子舞は盛んに行われた。これは非常に不思議な現象であると言わざるを得ません。しかも、先ほども申しましたとおり、たとえば青黄赤白黒の五つの色の五色獅子をはじめ、いろんな色とりどりの獅子が舞を舞っている。そして、その舞、踊りには非常に迫力があつて、これがまた面白い。ここまで考えますと、はたして東アジアの人々は、この獅子舞に何を託していたのか、疑問でなりません。

今日は、その疑問の一端を、東アジアにおける五色獅子の交流の歴史から探ってみることにしましょう。まず獅子の呼び名ですが、獅子のことを、インド・ネパールでは「シンハ」と言います。チベットでは「センゲ」、それからシンガポール・インドネシアでは「シンガ」、中国では「シズウ」、韓国では「サジャ」、日本では「シシ」と言い、

沖繩では「シーサー」と言います。

これを見ますと、発音がお互いに似ているところが面白いというか、興味深いですね。このように言葉、今現在それぞれの国の言葉は全部違うわけですが、それを超える言葉の類似性が見られるというのは、おそらく、今までの歴史のなかで、過去からの獅子、あるいは獅子舞の交流が非常に盛んであった事実を物語っている現象に他ならないと思います。

二 北青獅子は最も古いもの

では、その獅子、あるいは獅子舞の交流は、はたしてどんな経路で行われたものなのでしょう。まず、韓国のほうから話を始めてみたいと思います。

現在、韓国において、獅子舞は、主に仮面劇の中に登場しています。韓国の仮面劇は、西の海に面した海西地方、それから南の海に面した嶺南地方、ソウルを中心とする中部地方、このように三つに大きく分けられますが、その中の西の方面の鳳山ホンサン仮面舞、今日ここにいらっしやっている方々のなかには、去年の十一月に日文研で行われた鳳山仮面舞の実演および解説に参加された方もおられるだろうと思いますが、そのなかでも獅子舞は舞われていました。

それから、西の方面の仮面劇のなかに獅子舞が登場するものとしては、カンリヨン康翎仮面舞・ウシリュル殷栗仮面舞などがあります。それから南のほうのスヨン水宮野遊・トンヨン統營五広大、ハフエ河回別神巫楽仮面戯などにも、それぞれ獅子舞は含まれています。

しかし、これはあくまで現在まで伝わっているものであって、その他にも韓国ソクの獅子舞は、少なくとも一九四〇年以前までは、ヨンイ京畿道の龍仁、スンチヨン平安南道の順川、ソク黄海道の松禾・フアンジュ黄州、キヨウウキン咸鏡北道の慶源・チヨソク種城・ムサン茂山・ミヨチヨン明川・キヨソク鏡城、ジヨピヨン咸鏡南道の定平・ヨソク永興・ホンワソク洪原、コソク江原道の高城・ウルチン蔚珍・フエンソク横城などで行われ、もう全部言い切れないほど、ほぼ全国的な分布を見せていました。¹⁾

ということは、獅子、それから獅子舞が、韓国人にとって非常に親しみやすい芸能であつたことを物語っていると思います。そのせいも、現在もそれぞれの獅子舞はそれぞれの土地にすっかり定着した様子を見せています。その内容はそれぞれの仮面劇によって違うわけですから、内容は別にして、登場する獅子の色だけ、今日は色の話になつていゝるわけですから色だけを見てみると、まず鳳山と殷栗などでは白い獅子ですね。

鳳山では、白い獅子が舞を舞う。それから康翎では、胸の部分に赤を帯びた白い獅子が舞を舞う。それから、水宮では茶色の獅子、それから統營では茶色の縞模様の獅子。それから最後に河回では、河回の場合は、日本の東北地方の鹿踊りに似ているもので、

獅子舞とは言つても、頭の両端に角みたいなのが二つ付いている。このようにいろんな形の獅子が、それぞれ舞を舞い、各地方の特色を競っているわけです。

しかし、総合的に見てみると、これらの獅子舞はあくまでも仮面劇のなかの一部分に過ぎません。要するに、それぞれの仮面劇にはいろんな場面があつて、そのなかにポイントと、一つ獅子舞が入っている。そんな感じですよ。それはおそらく、地方によつて経緯は違うでしょうが、獅子舞が全国に広まって各地に根を下ろして行く段階において、以前から活発に行われていたと思われる仮面劇に吸収され、その一部分として定着してしまつたからであらうと思われまふ。

それに比べて一カ所、東北地方、韓国の東の北の地方にある、北に青いと書く北青という所に伝わる「北青獅子戯」、これは仮面劇とは言わないで、獅子戯と言いますが、これは、題目からもはつきりしているように、獅子舞が中心になっている民俗芸能なわけです、この場合は、事情が違います。名前からも明らかのように、これは獅子舞を中心とする民俗芸能であります。

もちろん、だからと言つて、この北青獅子戯も、獅子舞だけで構成されているわけではありません。舞童・社堂・僧侶・居士・漢方医なども登場はするが、しかし、獅子の役割に比べれば、これはほんとうに脇役に過ぎません。人間が獅子の脇役になっている

わけです。しかも、この人間たちは、近代に入ってから付け加えられた役であって、もともとは獅子舞が中心でありました。

その獅子が、今映像で見せしますが、「写真1」のようなものです。どうですか、皆さん。これは、まず外見からみて、体一面が青・黄色、それから赤・白・黒の五つの色の毛皮で出来ている、言わば、今日のテーマの五色獅子であります。今まで見てきた白、あるいは茶色などの、簡単に単純な色で出来た他の地方の獅子とは比べものにならないほど、色鮮やかですね。毛皮を色鮮やかに作るのもまた大変だそうで、五つの色の糸を、いちいちバランスよく布地に編んでいく作業には、非常に手間がかかるみたいです。

ところで、五色と言えば、皆さんもすぐ思い出されるように、陰陽五行説というのがあります。陰陽五行説によって、東アジアでは古くから、一つ一つの色にそれぞれの意



写真1 五色でできている北青獅子

味を持たせていました。この思想が「北青獅子」の五色にもそのまま受け継がれているのではないだろうか、私は思います。

実際、民俗学者である田耕旭教授が、このことについて、獅子舞を演じている古老たちに聞いたところ、北青の獅子が五つの色で作られるようになったのは、断定はできないものの、ずいぶん古くからであるということでした。またその点が高く評価されて、北青獅子戯は、一九六七年には、韓国の重要無形文化財第十五号として指定されました。要するに、この北青獅子戯に使われる五色獅子というのは、陰陽五行説とも通じる、韓国では非常に歴史の古い伝統的なものである、ということなのです。

三 沖繩に伝わる五色獅子

では、日本の場合はどうでしょうか。日本にも、はたして五色獅子は存在するのでしょうか。存在するならば、その歴史的な流れはどのようなものでしょうか、といった問題を、韓国に続いて、取り上げてみることにしましょう。

まず、日本の獅子舞の現状を見てみますと、日本の獅子舞は全国的に分布する大陸系のもの、これは普通二人立ちの獅子舞と言っていますが、中に二人が入って舞を舞う形のものであります。それから主に東日本に分布する一人立ちの獅子舞と、主に東北地方

に分布する鹿踊り、そして各地に点在する多数立ちの獅子舞とに大別されます。

実はこの分類の仕方は、いまこちらにいらっしやる高橋先生の分類でありませんが、そしてそれは昔からの民俗学者などの分類の仕方を受け継いだものでもありますが、それはともかく、一九九八年の九月末現在、日本の獅子舞の数は全国で七八七八ヶ所に及んでいます。これは、ほんとうにすごい数だと思います。

韓国人に獅子舞が親しまれているとするなら、日本人にも、同じことが言えるだろうと思います。全国を七八七八に割ると、ほとんど町ごとぐらいになるんじゃないでしょうか。このようにたくさんの方の数、しかも、たくさんの方の種類の獅子舞が現在も日本全国の津々浦々に伝わる。この数は、民俗芸能を主に調べたものでありますが、実はそれだけではありません。日本の獅子舞は、他の伝統芸能と言われるもの、たとえば太神楽、田楽、舞楽、能楽、歌舞伎などにも、それぞれ含まれています。

なかでも、能の『石橋』をご覧になった方々も多いだろうと思いますが、『石橋』のなかでは、白いたてがみをした親獅子と赤いたてがみをした子獅子とが、激しい舞を競うんですね。これはたいへん印象的な場面です。

しかしながら、こんなに全国的に獅子舞が流行っているにもかかわらず、五色獅子となりますと、日本の数多くの獅子舞のなかで、五色獅子と認められるものは、少ないで

すね。「私の古里には、こういう五色獅子がありますよ」とおっしゃりたい方がいらっしやれば、後で教えていたいただきたいんですが、私が調べた範囲では、沖縄県の浦添市の勢理客、それから同じく浦添市の仲西、そして具志川市、宜野湾市の獅子が概ねそれにあたるのではないかと思います。²⁾

「写真2」が勢理客ですが、ジツチャクと読むんだそうです。沖縄の言葉は読み方が難しくてなかなか読めないんですが、とにかくこれが五色でできた獅子のように見えます。赤もあれば、白もあって、黄色もあれば、混じってはいるものの、黒と青もあります。よく見ますと、まさしく五色の毛皮でできているのが分かります。

それから「写真3」、これは同じく浦添市の仲西の獅子ですが、わりと色がはっきりしているのが特徴です。これで、浦添市のなかには、二ヶ所も五色獅子が伝わっているのが分かります。それから、次の「写真4」が具志川市の獅子ですが、何か餌食でも狙っているような恰好をしているこの獅子も、体全体に赤みを



写真2 沖縄県浦添市勢理客の五色獅子

帯びてはいるものの、詳しく見てみますと、五色ともいべきいろいろな色でできています。

それから「写真5」、これが宜野湾市のものですが、これは赤系統の毛皮と青系統の毛皮に大きく分けられますけれども、その中間の部分にいろんな色が混じっていて、詳



写真3 沖縄県浦添市仲西の獅子

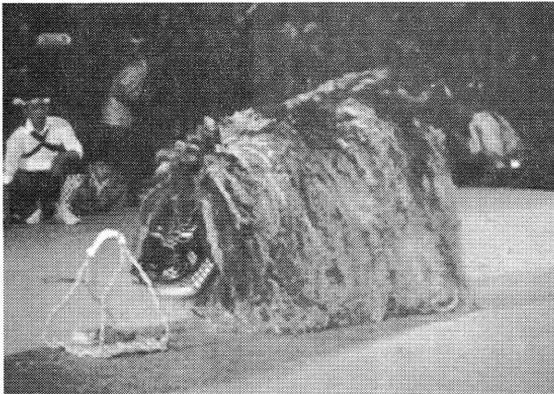


写真4 沖縄県具志川市の獅子

しく見れば五色のようにも見えますね。もちろん全部で五色とは断定できないんですが、とにかく、このように、沖縄には五色獅子が存在していることが言えます。

となると、全国的に見て八〇〇〇にも及ぶ獅子舞のなかで、なぜ沖縄にだけ五色獅子が伝わるのか、というのが問題になりますね。勢理客の獅子舞を解説した次の文書を見てみましょう。

獅子舞が何時頃沖縄に伝来したのかは定かでは無いが、中国より入って来たのは間違い無い事である。例えば古い例としては、一四〇〇年代に造築された玉陵たまうどんの獅子や、年代ははっきりしないが、浦添ようどれの石棺等にも獅子が描かれている。これ等が沖縄で最も古いものであろう。³⁾



写真5 沖縄県宜野湾市の獅子

要するに、簡単に言つて、私がここで言いたいののは、沖縄の最も古い形の獅子が今まで紹介したいくつかの所の五色獅子であるということ、それがどれだけ古いものなのかは、引用のとおり一四〇〇年代、すなわち十五世紀に沖縄に上陸したということです。引用のとおり、実際中国から伝来したかどうかは別にして、指摘の通り、沖縄の獅子が本土ではなく海外から輸入されたものとしますと、日本本土のなかで、近代に入つて本土に編入された沖縄にだけ五色獅子が伝わるのは、近世までの文化の伝統が異なつていた事情を考え合わせれば、ある意味では、当たり前なことなかもしれません。

四 日本の五色獅子をさかのぼる

では、日本の本土には、五色獅子は存在しなかつたのでしょうか。

だいたい日本の固有というか、日本化された文化現象を調べる時、まず目をつけなければならぬのは、平安時代ですね。それは、その前の奈良時代までは積極的に大陸の文化を受け入れた時代で、平安時代になつてから、国風文化と言いますか、「かな文字」の発明などに伴つて、ほとんどの文化が日本化され、定着したからであります。

それで、私も、平安時代の文献を調べて見ました。平安末期の貴族、藤原通憲（？）（一一五九）が描いた『信西古楽図』というものがあります。この本は、主に平安時代の

舞楽を絵で示したものでありますが、そのなかには、獅子と覚しき絵が三つほど入っています。順序別に言うと、「新羅狢」と名付けられているもの、「写真6」のように二人立ちの獅子を一人の男が綱をつけて引いているもの、それから、前後に子供を伴った角のある二人立ちの獅子が、それでありませう。

「写真6」を見て下さい。これは昔のものですから、カラーではなく白黒ですが、その右上には、次のように書かれています。読んで見ますと、

師子舞 文献通考出唐太平楽亦謂之五方師子舞

と書いてありますね。要するに、これは獅子舞の絵であると断言しているんですね。『文献通考』というのは元の時代の馬端臨という人が書いた政治書なわけですが、それによりますと、唐の雅楽の「太平楽」では「五方師子舞」とも言っていた、という意味です。



写真6 藤原通憲の『信西古楽図』
のなかの獅子舞

この五方師子舞というのが面白いですね。この言葉は、『旧唐書』の「太平楽」の条にも、「大平楽、亦謂之五方師子舞」とそのまま載っていますが、まず「五方」とは、いったい何を意味するのでしょうか。⁴⁾

結論から言いますと、五方というのは、陰陽五行説の「五行」からきているものであります。五行は、色に当てはめられるのもちろん、春夏秋冬の季節、東西南北の方向、それから身体の部位など、実にいろんな事柄に当てはめることのできる中国の思想で、このことから私は、この「五方師子舞」が、それぞれ一つの色で飾られた五匹の獅子の舞であつたのか、あるいは五つの色でできた一匹の獅子による舞であつたのかは別にして、広い意味での「五色獅子」をさす言葉ではなかつたかと推定してみました。それから、「師子」と「師」の字がちよつと違つているんですね。師匠の「師」、先生の意味の「師」になつていますが、それはいわゆる当て字で、「獅子」と同じ意味であろうと思ひます。

ところで、『信西古楽図』は、先ほどもご紹介いたしましたとおり、藤原通憲が描いた書物であります。彼がいつ生まれたかは未詳ですが、彼が亡くなつた年は、一一五九年です。今に伝わる伝本は江戸時代に藤原貞幹が模写したものですから、確かなことは言えないにしても、もし江戸の儒者藤原貞幹が原本を正しく模写したとするならば、少

なくとも藤原通憲が生きていた平安時代、つまり十二世紀の半ばまでに、日本に「五色獅子」が存在していたことが言えると思います。

では、それ以前はどうでしょうか。平安時代の舞楽の前に、「楽」で言うなら、奈良時代には伎楽というものがありました。伎楽は、解明されている部分が舞楽よりもっと少ないのですが、たとえば『教訓抄』および法隆寺、東大寺、西大寺、観世音寺などの財産目録である『資材流記帳』を見るかぎり、伎楽にも、獅子舞は含まれていました。

例を挙げましょう。七四七年、すなわち八世紀の半ばに作成された『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』というものの伎楽面の欄には、「師子弑頭 五色毛在袴四腰」という文字が見えます。⁵⁾ これは五色獅子の存在をあらわす記録で、「五色毛」が五色獅子を指しているのは、言うに及びません。そして、「弑頭、袴四腰」は、人間の足が二つであることから、二人立ち獅子の、二匹分をあらわしているように思われます。

なお、この事実は、一九八一年から一九九四年まで奈良国立博物館などが調べた法隆寺の『昭和資材帳』というのがありますが、そのなかに載っている伎楽の獅子の仮面からもうかがい知ることができます。⁶⁾

「写真7」がそれですが、この獅子は、布貼りのあと、黒漆地、白色下地に彩色を施したものであります。長い歳月にさらされているので殆ど毛が残っていないのが残念で

すが、肌は黄土色、瞳は黒、白目の部分に朱彩、その周りに金箔が押されています。青黄赤白黒の五つの色のなかで、青を除く四つの色が、一応揃っていることが分かります。⁷⁾

では、実際、伎楽の獅子に、青色は含まれていなかったのでしょうか。この問題について、また一つ面白いのは、昭和の大修理を終えたのを記念して、東大寺で、一九八〇年に伎楽を復元しているんですね。この場面をNHKが放映したのが「写真8」なわけですが、伎楽の獅子を獅子児が紐というか、綱をつけて舞台に上らせる場面の写真を見るかぎり、獅子の背中のおちばん上の部分が青になっていることが分かります。⁸⁾

さっきのは仮面だから顔だけの話でしたが、今度のは毛皮、毛皮そのままの再現は出来なかったにしても、一応布を被せているんですね。五つの色で出来ている布を被せています。「写真9」



写真7 法隆寺の獅子面『古面』岩波 1982より

が舞台にあがった場面です。ご覧になってください。それから、舞樂の舞台って、こんなものですね。舞樂の舞台と言えば、現在は大阪の四天王寺に石舞台が残っているだけです。復元されたのは木で作った木造舞台で、それはこんな形だったわけです。

ちなみに舞樂の舞台は日本の舞台の始まりと言われているんですが、それはともかく、「写真9」の舞台の後ろの垂幕を見て下さい。皆さん、神社仏閣に行きますと、建物の表に垂幕を垂らしていますね。この前私は妙心寺で見ましたが、この正月にも、あちら

こちらに沢山ありました。その垂幕もだいたい五つの色になっていきます。獅子の五つの色と垂幕の五つの色が、お互いによく調和していて、とてもきれいに見えるではありませんか。

このように、日本でいちばん古い歌舞、「楽」

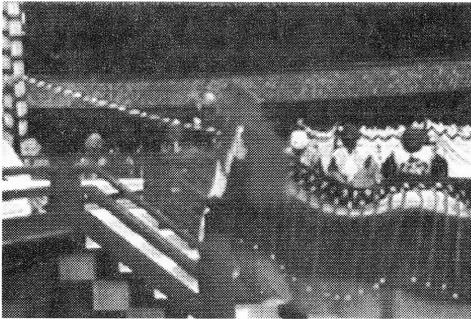


写真8 東大寺で復元された伎樂の獅子
「アジア獅子紀行」NHK総合より

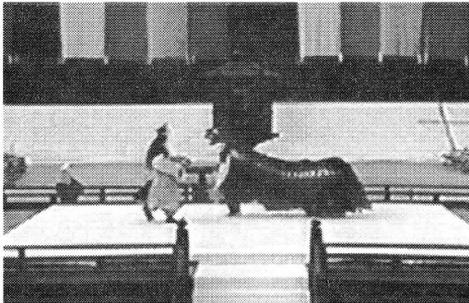


写真9 伎樂の獅子 NHKより

とされている伎楽においての獅子舞は、少なくとも復元されたものを見るかぎり、これは五色獅子になっていた。とすると、この伎楽の実体は、果たしてどんなものだったのか、というのが問題になってきます。

伎楽は、韓半島からの伝来の歌舞でありました。日本書紀六一二年二月条に、次のように書いてあります。

又百濟人味摩子帰化、曰学于呉得伎楽舞、則安置桜井而集少年令習伎楽
舞、於是真野首弟子、新漢、齐文二人、習之伝其舞

これは、百濟からの帰化人味摩子が、呉から学んだ伎楽ができると言うので、聖徳太子がこの人を歓待し、奈良の桜井に学校を開かせ、伎楽を後世に伝授させた、という意味であります。

でも、それより、ここでいう呉国という言葉が、私にはちよつと気になります。呉国が、実際の呉国なのか、あるいは、呉国の都であった南京なのか、それとも、皆さんがたとえば着物屋さんに行くのを呉服屋さんに行くとも言うように、中国全体を指している言葉なのか、という問題がそれです。⁹⁾

個人的には中国全体を指しているのではないかと思うんですが、それは別にして、とにかく、この東大寺で復元された獅子舞、伎楽のなかの獅子舞と言うのは、五色獅子であった。そしてそれは、中国から韓半島を通して日本に伝わったもので、その五色獅子は、平安時代の末期まで続いた後、どんどん日本化され、今の七八七八ヶ所の獅子舞のような形になった。その一方で、沖繩には、また別の系統の獅子舞が伝わり、今に至っている。今までの私の話は、取りあえず、このように整理できるだろうと思います。

五 韓半島の獅子舞の記録

では、もともとの韓半島の事情はどうだったのでしょうか。

まず韓国では、高麗時代の文人である李穡イセクという人、この人は一三二八年から一三九六年まで住んでいた人ですが、李穡の書いた漢詩のなかに「驅儼行」というのがあります。「驅儼」の「儼」というのは、「追儼」の「儼」です。「追儼式」がそうであるように、要するに「厄払い」「魔除け」という意味で、この詩は、前半では鬼やらいの儀式を、後半ではそれに続く歌舞百戯を、それぞれ描写しています。この詩を読んでいきますと、その後半の始めに、「舞五方鬼踊白沢」という部分が出てきます。

ここで言う「白沢」というのは、獅子の別名です。¹⁰⁾それから「五方鬼」の「五方」は、

東西南北に中央を足した五つの方面を指す言葉でありますから、五つの方面で鬼が舞いを舞っている。そしてその鬼と共に、獅子も五方舞を舞っていたということです。

それから、その次の行あたりを見てみると、「低回長袖舞太平」と書いてあります。長い袖を低く回しながら「太平」を舞っていたという意味で、「太平」は、先ほどの『信西古楽図』にも「太平楽」というのがありました。左舞と右舞を番舞に舞っている舞楽の中で「太平楽」は左舞に属する舞ですが、この「太平楽」、すなわち別名「五方獅子舞」を韓国でも舞っていたということですから、そしてその舞は、言うまでもなく「五色獅子」による舞であったわけですね。

では、それ以前はどうでしょうか。李穡は十四世紀の人ですが、今度は九世紀の後半の話になります。崔致遠チエチウオシ（八五七〜？）という人の、『郷楽雜詠五首』という漢詩を見てみましょう。「狡猊」という所です。

遠涉流沙萬里來

西域より流沙を渡り 遠く万里を来たれり

毛衣破盡着塵埃

毛は抜け埃ほこりにまみれて

搖頭掉尾馴仁德

頭揺すり尾を振りつつ仁徳に馴れたる

雄氣寧同百獸才

百獸の王たる獅子はそなたか

11)

まず「狻猊」という題目なんですが、この字は韓国では「サンイェ」といって、「百獸の王たる獅子」と出ているように、獅子をあらわす言葉です。日本でも「サンゲイ」、あるいは「カラシシ」と読んで、同じ意味を持っています。この獅子が、西域から伝来される過程で、人間に馴染まれて頭をゆすり、尾を振りながら舞を舞う姿に転じていた、という内容ですね。

では、その獅子、そしてその舞は、どんなものだったのでしょうか。ご参考までに、土田杏村の説を見てみましょう。土田杏村は、「新羅樂と散樂伎樂舞樂」という論文のなかで、「この詩を見ると、獅子舞の内容は幾分ユウモアを含み、獅子も徒らに威容を張つたものではないやうだ」と指摘した上で、「(狻猊)と題してあるのは、言ふまでもなく伎樂の獅子舞である」と断定しています。¹²⁾ そうなると、「狻猊」が「伎樂」の獅子であったという指摘から、この舞は、日本の伎樂がそうであったように、「五色獅子」による舞であったということが推定されます。

それから、崔致遠という人は十七年間も唐に留学し、現地の科挙にも及第し、官職にまで就いたことのある秀才でした。もしかしたら、この詩は、歴代の中国のなかでも「五色獅子」が最も流行っていた留学先の唐の獅子舞を、懐かしく思い出しながら書いていたものであるかもしれません。いずれにしても「狻猊」の舞が五色獅子舞であった

とするならば、韓国の「五色獅子」の歴史は、崔致遠が活動していた九世紀後半、新羅時代の末期まで溯ることが出来ます。

では、それ以前はどうでしょうか。断言はできないものの、それ以前のことについても、いくつかの推測はできます。取り敢えず于勒ウルクという人に注目したいと思います。この人は、「伽倻琴カヤクム」つまり日本の琴に似た楽器を作ったと言われ、韓国では楽聖として知られている人なんです。この人が、「于勒十二曲」というものを作ったことがあります。その「于勒十二曲」のなかの八番目の曲に、「師子伎」というものが含まれています。¹³⁾

まず、韓国で最も古い歴史書である『三国史記』、三国というのは高句麗・新羅・百済のことなんです。その『三国史記』に出ている于勒についての記録をまとめてみましょう。

カシルワン 嘉実王に命じられ、十二の伽倻琴曲を作った楽師于勒は、国が乱れてきたので、伽倻琴を携え、新羅の真興王ジンフンワンのもとへ帰化した。それで真興王は、キエコ階古、ホブチ法知、マントク万徳の三人に、于勒について学ぶように命じた。于勒は、彼らの技能を量って、階古には琴を、法知には歌を、万徳には舞を、それぞれ教えた。¹⁴⁾

要するに、伽椰の楽・歌舞が優れていたもので、新羅でも、亡命してきた楽聖于勒を師匠に定め、それを教習させた、ということですね。ここで注目にあたいするのは、琴と歌と舞を別々に分けて教えたということとです。ということは、「于勒十二曲」が曲つまり音楽だけではなくて、舞を伴った芸術であったということになるからです。

では、どんな舞だったのか。金東旭キムトシウクの説をご紹介します。

于勒に習った弟子たちが、真興王の前でそれを披露した時は、それを五曲に縮めていた。後の神文王シムンワが新村に行幸した時の七つの曲のようなもので、神文王は「酺(宴)」を開いて楽を演奏(幸新村設酺奏楽)させたのだから、酺の形式が問題になる。酺は、『後漢書』文帝記の「酺五日」の師古の所に、酺を賜った者は皆伎楽を作った(賜酺者蓋取作伎楽)と出ている。したがって、酺では伎楽が舞われていたことが推測される。そこで、于勒の十二曲も伎楽の一種であり、当然ながら「師子伎」の舞も、伎楽の舞であったことが分かる。¹⁵⁾

金東旭の説が真実だとすると、于勒が新羅の真興王に亡命・帰化したのが五五二年、すなわち六世紀半ばのことですから、少なくとも五・六世紀あたりの韓国に、伎楽の獅

子舞、つまり「五色獅子」が存在していたことが分かります。そしてそれからの詳しい経路は分からないものの、その「五色獅子」が綿々と伝わり、先ほどの「北青獅子」にも、何らかの形で影響を及ぼしているのではないのでしょうか。

六 唐の五色獅子と西域

それではですね、この韓国に伝わる獅子というのが、どこから始まったものなのかを検討してみましょう。言うまでもないことですが、それは、当時のほとんどの文物がそうであったように、獅子および獅子舞も、他ならぬ中国から伝わったものであるように思われます。

では、中国での獅子および獅子舞の事情は、どうだったのでしょうか。一番最初に申しあげましたとおり、獅子は、インドにしか棲息しない動物であります。したがって、この獅子がいつ頃中国に伝わり、獅子舞になつて韓国および日本に伝わったのか、という問題になるわけですが、それはさて置き、まず歴代の中国のなかで、獅子舞が一番多く流行っていたのは、唐の時代でした。

唐の詩人李白（七〇一―七六二）の書いた『上雲楽』という漢詩を見てみましょう。「上雲楽」、雲の上で楽を奏でる。いい名前ですね。実は、王様の長寿を祝う詩なんです

が、そのなかには、次のような部分があります。

五色の師子／九苞の鳳皇／是れ老胡の雞犬／鳴いて舞い帝郷に飛ぶ／淋漓として颯
沓たり／進退して行を成す／胡歌を能し／漢酒を献ず／双膝を跪き／兩肘を並べ／
花を散らし天を指して／素手を挙ぐ／竜顔を拝し／聖酒を献ず¹⁶⁾

宴の様子を描写した内容なのですが、「双膝を跪き／兩肘を並べ／花を散らし天を指して／素手を挙ぐ」という件から見ると、獅子と鳳皇とが出てきて舞を舞う場面であることは、明らかですね。「鳳皇」は、『山海経』によれば、五色でできている鶴に似た形の鳥のことで、空では、五色の神鳥の鳳皇が鳴きながら飛びまわり、地上では、五色の獅子が膝をつき、肘をはり、手を上げたり下げたりしながら、迫力あふれる舞を舞っていた。まるで天地そのものが五色で彩られたような風景、と言えましよう。

これがいちおう、唐の時代の宮中での獅子舞、五色獅子舞の場面であります。しかし、唐の時代の獅子舞の流行は、宮中にだけ限るものではありませんでした。一般庶民の間にも、獅子舞はかなり広まっていました。『中国獅子芸術』（徐華鎰・楊古城編 軽工業出版社 一九九一 三四二頁）という本に、「獅子舞は唐代になって普遍的に盛んになった。宮廷はもちろんのこと、軍営でも、民間でも、活動的に行われた。（舞獅到唐代

普遍盛行 無論在宮廷 軍營還是民間 舞獅成了人們喜聞樂見的活動」という指摘があるくらいです。

それでは、このような中国の獅子舞は、どこから伝わったものなのでしょうか。それは、先ほどの『上雲楽』のなかにも「是れ老胡の雞犬」と出ているように、西域から伝わったものであります。¹⁷⁾この西域から伝わったという認識は、中国人の間にだいぶ後まで根強く残っていたようで、たとえば明の時代の『明憲宗行楽図』（写真10）を見ても、王様の行列の先頭をなす獅子を案内している獅子児の頭の部分が、一般の帽子ではなく、西域の独特なターバンで巻かれています。それから、この人の服装そのものも、西域のもののように見えます。

とすると、中国に獅子が伝わったのはいつ頃なのか、が疑問になってきます。これについては、宮尾慈良の指摘を見てください。

元来、中国には獅子は存在しない。そこで中国における獅子について文献資料を渉獵することにした。一説

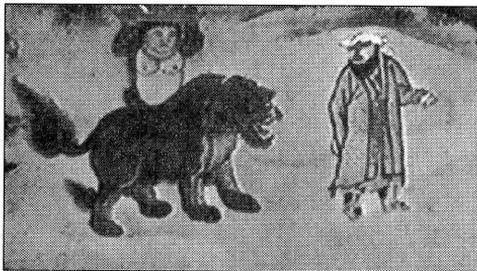


写真10 『明憲宗行楽図』の部分 NHKより

には漢の武帝（紀元前一四〇～八七）のときに、西域との交通が頻繁になりその交通の道を開く契機をつくった張騫が獅子を西域より伝えたという。後漢・班固『漢書』によると武帝の建章宮の脇にある奇華殿には四海夷狄（蛮族）の器服珍宝が展示されていた。そのなかに火浣布（石綿で作った耐火布）、切玉刀（硬い玉を切る刀）、巨象、大雀とともに獅子の語が見られる。ここでは珍獣としてあつたようである。また『漢書』西域伝にも「巨象、獅子、猛犬、大雀の群、外にある困いに飼われている」という記がみられるので、武帝の頃に、その存在は人の知るところとなっている。¹⁸⁾

中国と西域の間にシルクロードが開かれたのは、紀元前二世紀あたりの漢の時代だそうですね。この紀元前二世紀の漢の武帝の時に、獅子は、早くも中国に入ってきた。そしてそれは、象などとともにいわゆる珍獣、珍しい動物として扱われていた。なかでも獅子には、「百獣の王」というイメージがあつたので、たとえば皆さんが寺院や神社の前で阿吽の形をしている二匹の獅子、あるいは狛犬を見てお分かりいただけるように、辟邪進慶の意味を持たせていた。これは獅子の原産地であるインドおよびネパールなどの国々でも、お寺などの正門の前に獅子の彫刻が飾つてあるのと同じ現象ですが、ともあれ、その辟邪進慶を願う延長戦のうえで、やがて獅子に象つた獅子舞もできたのでは

ないでしようか。

宮尾慈良の文章を、もう少し見てみましょう。

北魏（三八六～五三四）頃になると、資料には獅子が寺廟の百戯のなかで演じられたのがおおく見られる。これは獅子舞が宗教的色彩をもつて演じられて、やがて獅子舞に対する民間信仰が仏教とともに発達することに注目している。北魏の楊衒之が誌す『洛陽伽藍記』の長秋寺の条に「作六牙白象負釈迦在虛空中……四月四日比象常出、辟邪獅子導引其前……」とある。¹⁹⁾

ここで注目したいのは、北魏の頃になって「獅子が寺廟の百戯のなかで演じられた」という件です。百戯のなかに編入されたというのは、動物の獅子が芸能の獅子舞として発達し、定着したことを意味するに他なりません。そしてそれは、『洛陽伽藍記』のなかの「辟邪獅子」という言葉が象徴しているように、そして私も先ほど言及したように、「辟邪進慶」の意味を持つ宗教的色彩の濃いものでありました。

そしてもう一つ、宗教のなかでも「仏教とともに発達」したという指摘にも、意味があると思います。仏教では、我々衆生を救済するため、文殊菩薩は獅子に、普賢菩薩は

象に乗って、それぞれ現われますね。この現象は、仏教とこれらの動物のイメージが密着していたことを意味し、逆に、これらの動物のイメージが仏教とともに勢いを得て普及されたことも、意味していると思います。

そしてそのイメージの普及、すなわち百獣の王獅子に辟邪進慶を託すイメージの普及が、時の流れとともに獅子舞を作り出し、やがては陰陽五行説の五色の意味と結合して、唐の時代にいたっては、五色獅子舞の全盛期を迎えていた、という発展の過程ではなかったのでしょうか。

七 ネパールの五色と中国の五色

では、もともとの獅子の棲息地であるインドにおける獅子のイメージは、どんなものであったのでしょうか。皆さんのなかで、インドを旅行なさったことのある方はお気づきになっただろうと思いますが、インドの紙幣の裏面、つまり日本では鶴などが入る所に、インドでは、獅子が描かれていますね。このように獅子を大事にする習慣は、インドでは、昔から根強いものがありました。

紀元前三世紀にインドを統一し、最初の統一国家であるマウリヤ (Maurya) 王朝を建てたアショーカ (Asoka) 王は、三匹の獅子が威容よく立っている姿の「アショーカ

王柱」を作ったことがあります。正しく国のシンボルマークとして獅子が定着した時期と言えましょう。そればかりではありません。インドの女神ドゥルガー (Durgā 写真11) は、常に獅子に乗って現れては、災難から衆生を救済してくれます。

身近な動物であった獅子は、インドのなかで、まずはこのようにイメージされました。その後、アショーカ王の崇仏政策などに力づけられ、先ほどの宮尾慈良の指摘のように、仏教の伝播とともに西域に渡り、やがて中国にまでたどり着いたものと思われれます。

では、インドおよびその周辺のシルクロードの国々に、中国の唐の時代に流行したような五色獅子舞は、存在しないのでしょうか。インドの場合、過去のことはよく分かりませんが、現在行われている獅子舞のなかで最も有名なものの一つであるトラン村のチョウという獅子舞は、五色獅子ではありません。

その代わり、ネパールの仮面劇マハーカーリー・ピヤクン (Mahākālī Pyā Khan) のなかの獅子(写眞12) は、これは女神マハラクシユミの乗り物とし



写真11 インドの女神ドゥルガー (Durgā) 像 NHKより

て登場するものですが、この獅子は、背中に黒白赤黄青の布が被されており、五色獅子と認めるに十分であると思います。

では、マハーカーリー・ピヤクンの獅子の五色は、それぞれどんな意味を持っているのでしょうか。タイレット (TAILHET Jehanne H) の説明を読んでみましょう。

赤、暗青、白は、最も強力な色である。民間レベルでは、ヒンドゥー教タントラの色として受け入れられ、赤は月経の血・犠牲の血・怒りを、暗青はエネルギー・力を、白は精液・純粹・色あせた骨のような死を、それぞれ表す。黄色のような軟らかい色は、神々の寛容を表す。²⁰⁾

マハーカーリー・ピヤクンはカトマンドゥ地方だけでなく六つのグループが演じていますから、その全部が、このような解釈を下しているかどうかは分かりかねますが、タイレットの説明が的を射ていると



写真12 マハーカーリー・ピヤクン
(Mahākālī Pyākhan) のなかの獅子

するならば、この説明を読むかぎり、五色の意味が、ヒンドゥー教の影響のせいか、我々が日頃考えている五色のイメージ、つまり中国から伝わったそれとはだいぶ違っていることが分かります。

ここで一応、我々が日頃持っている五色のイメージを確認しておきましょう。五色のイメージは陰陽五行説から派生したもので、なかでも五行は、木・火・土・金・水の五つの元素が相生、あるいは相剋を通じて万物が循環するという、中国人の自然観そのものを代弁するものであります。²¹⁾

たとえば皆さん、「左青竜右白虎」という言葉をお聞きになったことがあるでしょう。これは左すなわち東は青、右すなわち西は白という意味です。同じく南は朱雀すなわち赤になり、北は玄武すなわち黒になります。最後に黄色は、皇帝という言葉が象徴しているように、中央すなわち人間が立っている真中を指します。孔子が誕生した折に現われたと言われている五人の老人も、五元素をあらわす「五蘊」を象徴していると言われていることから、この思想の歴史にはずいぶん古いものがあると言えましょう。²²⁾

ところで、実のところ、ネパールにも、中国の五行説に似たような五色の意味は、存在しているのです。ネパールはチベット仏教が盛んな国で、例えば、マハーカーリー・ピヤクンが演じられるカトマンドゥには、スワヤンブナート (Swayambhunath) とい

う寺院がありますが、その表には、仏経が書かれた五色の祈禱旗タルチヨ（写真13）が掲げられています。

このタルチヨの五色は、それぞれ地・水・火・風・空を意味し、天地自然の運行をあらわす摂理を象徴していると言われ、中国の五色と一脈相通しているのはもちろん、日本の五輪塔にまでつながっています。²³⁾ 普通の五重の塔ではなくて、五輪塔というのがあるでしょう。五輪塔は密教的なもので、下から地・水・火・空・風と五つの意味を持っているのだそうです。

にもかかわらず、マハーカーリー・ピヤクンの五色の意味がこれらと全く違うのは、なぜでしょうか。この劇の歴史についてクーマ・プラサード・ダーシヤン（Kumar Prasad DARSHAN）は、この劇はネパールの伝説に基づいたもので、十三世紀初めのアリ・デバ・マラ王朝（King Ali Deva Malla）に始まり、アナンタ・マラ王朝（King Ananta Malla 一二七四～一二一〇）には、民間に流布した、というふうな報告しています。²⁴⁾ 言い替えると、マハーカーリー・ピヤクンの素材となった伝説は、話そのものは古いかも知れませんが、それが劇としてまとまり、五色獅子が登場するようになったのは、十三世紀以来である、ということなのです。

となりますと、マハーカーリー・ピヤクンの「シンハは、その仮面の姿が中国系統の

それと類似している。これは、この舞を舞ってきたネパールのネワール (Newar) 族が、チベットを経由して中国と交易を行っていたという事実と深い関係がある」と主張する金蘭姫キムナンヒの論文が注目を浴びてきます。²⁵⁾ そして、馬場雄司が「五色のたてがみを持つシンハ

は中国の影響もみられるものである」と指摘しているように、中国からの逆輸入が考えられないわけでもありません。²⁶⁾

最後があまりにも曖昧な言葉で終わってしまいました。もうそろそろ時間になってまいりましたので、この辺で、今までの私の話を整理してみたいと思います。

まずネパールのマハーカーリー・ピヤクンのなかの獅子は、五色獅子であるという点

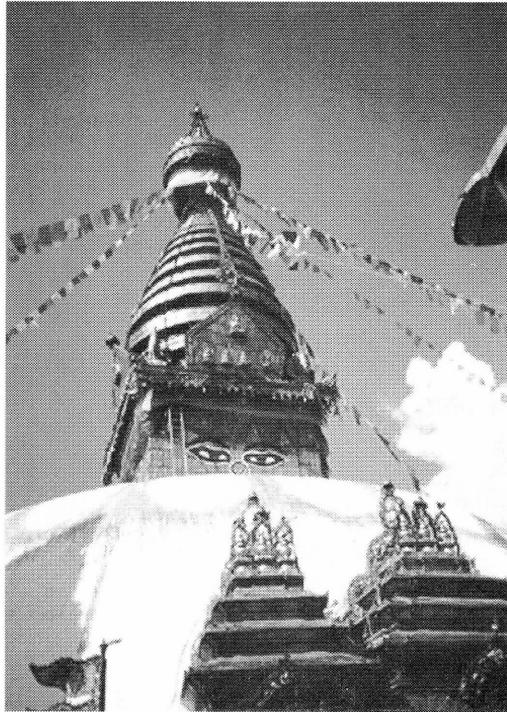


写真13 スワヤンブナート寺院の五色のタルチヨ

において、非常に面白いと思います。しかし、今まで検討してきたように、五色獅子の系譜図を描くにあたっては、現時点では、なんとも言い様がありません。

それからインドの獅子舞というのは、獅子がインドにその起源を發しているにもかかわらず、過去のことは分かりませんが、現在のところでは、五色獅子の形としては伝わっておりません。

むしろ五色獅子が流行したのは、獅子が中国に輸入されてからもだいぶ歳月が流れた唐の時代で、それはいわゆる陰陽五行説との結びつきによるものであったと推定されま

す。そして、中国の五色獅子は韓半島に伝わりました。古い記録が乏しいため断言はできないものの、北青獅子戯のなかの五色獅子として、今にその面影を残していると思われる

ます。また、伎樂とともに韓半島から日本に伝わった五色獅子は、獅子舞の民俗化が進むにつれ、五色をなくした形で土着化してしまいました。五色の思想だけは、たとえば神社仏閣の垂幕・能の上幕・相撲の土俵をはじめ、五色揚げ・五色海老・五色花・五色素麵・五色の糸・五色の酒などの形で、今に伝わっています。

それから、沖繩の勢理客などに伝わる五色獅子については、今現在その系譜を断定す

ることが難しいので、今後、もう少し研究を重ねる余地があります。

この辺で、私の話は終わらせていただきます。長らくお待たせいたしました高橋裕一先生をはじめ、コメンテーターの稲賀繁美先生、それからフロアの皆さんからも忌憚のないご指摘、ご質問をいただきましたたいと存じます。ご清聴、どうもありがとうございます。

注

- 1) 『朝鮮の郷土娯楽』 朝鮮総督府 一九四一（引用は、李杜鉉 『朝鮮芸能史』 東京大学出版会 一九九〇 二二二頁） なお、韓国の獅子舞の分布については、一九五〇年代に入って金日出が調べたものが知られている（『朝鮮民族タルノリ研究』 平壤 科学院出版社 一九五八）。それによると、朝鮮総督府が調べた時より、もっと広い範囲に渡って獅子舞が行われていたことが分かる。（詳しくは、田耕旭 『韓国仮面劇 — その歴史と原理』 悦話堂一九九八 二九二頁）
- 2) フォーラムの後でなされた高橋裕一獅子博物館館長のコメントによると、たてがみの部分が五色と認められる獅子舞は、埼玉県にも点在する。入間郡日高町新堀の高麗神社、東松山市神戸の神戸神社の獅子舞がそれである。そして、少なくとも三色以上の色とりどりのものが入間郡名栗村に伝わる。当地の武蔵野平野が、七一六年に來在高句麗の若光をまつる高麗神社のある所

で、韓半島からの帰化人の多い場所であったことと無縁ではないだろう。

- 3) 宣保栄治郎 「獅子舞Ⅱ浦添市勢理客民俗芸能」 第四回民俗芸能交流会パンフレット 『沖縄の民俗芸能(一)』 南風原町立中央公民館 一九九一、三月に収録
- 4) 『旧唐書』卷二九 志第九 音楽二 中国書局出版 一九九七 参照
- 5) 竹内理三編 「法隆寺伽藍縁起并流記資材帳」 『寧楽遺文』 東京堂出版 一九六二・三・五七頁
- 6) 西川杏太郎・岡田健 「法隆寺の仮面遺品」 『法隆寺の至宝 第十卷』昭和資材帳』 小学館 一九八九 一九四頁
- 7) 京都国立博物館編 『古面』 岩波書店 一九八二 二七七頁 参照
- 8) 「アジア獅子舞紀行」 福岡NHK制作 一九九八、一、一日 朝八時 NHK総合テレビ放映
- 9) 呉国の実体について、たとえば李杜鉉は、「中国の南にあった呉国である」と断定したうえで、「百済は南朝と交通しており、仏教も東晋を通して輸入したのだから、仏教の経典によく出る言葉の伎楽は、仏教とともに伝来された西南方系の西域楽の一種であろう」と推定している(『師子伎伎』『東西文化』二二号 啓明大 一九六八)。しかし、呉国は、二八〇年に西晋に滅ぼされた国で、味摩子の六一二年とは、時期的にかけ離れていることが指摘できよう。なお、成沢勝は「新資料群の検証で究明された伎楽の故地」(『韓国演劇学』第十三号、韓国演劇学会 一九九九、十二月)という論文で、「呉」が韓半島の海西地方にあたると主張している。
- 10) 白沢は、神獣および獅子の別名であるが、この詩では、獅子の意味に使われたと思われる。なぜなら、獅子のことを神獣と呼ぶ場合もあり、中国の前例からして、追儺に登場する辟邪の動物は獅子だからである。(田耕旭 『北青獅子ノリ研究』 太学社 一九九七 一二頁)

- 11) この詩は、金富軾著『三国史記』卷三二に載っている。なお、現代語訳は、金思燁（六興出版一九八二）による。
- 12) 土田杏村 「新羅楽と散楽技楽舞楽」 『土田杏村全集十卷』 第一書房 一九三六 三七七～三七八頁
- 13) 「于勒十二曲」は、加羅都・上加羅都・宝技・達巳・思勿・勿慧・下奇物・師子伎・居烈・沙八兮・爾赦・上奇物である。
- 14) 『三国史記』卷三二 「伽椰琴」条には、「伽椰國嘉實王……乃命樂師省熱縣人于勒 造十二曲 後于勒以其國將亂 携樂器投新羅眞興王」とある。それから、『三国史記』卷四 「新羅本紀第四」 眞興王一三年（五五二）条には、「王命階古法知萬德三人 學樂於于勒 于勒量其人之所能 教階古以琴 教法知以歌 教萬德以舞」とある。
- 15) この部分は、金東旭の説による。詳しくは、金東旭 「于勒十二曲について」 『新羅伽椰文化』一号 青丘大 一九六六を参照されたい。
- 16) 原文は、「五色師子 九苞鳳皇 是老胡雞犬 鳴舞飛帝鄉 淋漓颯沓 進退成行 能胡歌 獻漢酒 跪雙膝 竝兩肘 散花指天 舉素手 拜龍顏 獻聖壽」である。現代語訳は、武部利男 訳 『李白』 世界古典文学全集第二七卷 筑摩書房 一九七二 一一一頁による。
- 17) 梁の周捨の『上雲楽』には、「鳳皇是老胡家鷄、師子是老胡家狗」と出ている。なお、獅子を「狗（犬）」と称しているのは、「狛犬」の起源を考えるうえで、興味深い言い方であると言えよう。
- 18) 宮尾慈良 「中国の獅子舞―北獅と南獅」『アジア演劇人類学の世界』 三一書房 一九九四 一六四頁

前掲同書 一六五頁

- 20) 19) タイレット (TAILHET Jehanne H) の五色の意味分析は、"The Tradition of the Neva Durga in Bhaktapur, Nepal" in *Kailash: A Journal of Himalayan Studies* 六／二 八一～九八頁。Kahmandu, Ratna Pustak Bhandarにおおつ行われたもの。原文は「Red, blue-black and white are the most powerful color. The folk level interpretation of the tantric color symbolism is that red stands for menstrual (Y₁) blood, sacrificial blood and anger; blue-black stands for energy and power, and white stands for semen, purity, and death (bleached bones). The milder colors such as yellow signify the 'gentler gods and goddesses」であらう。なお、引用は「奥村けい子 『Aspect of Mahākāfi Pyākhan』 『Dance and Music in South Asian Drama』 Academia Music Ltd. 一九八二 一七〇頁による。翻訳は筆者。
- 21) 韓国における陰陽五行説の影響について宋錫夏は、「五広大小考」『朝鮮民俗』一号 一九三三のなかで、「陰宅陽宅をはいめ、婚嫁、洽葬、移徙、上樑、修理、裁衣、動土、開市、納財、遠路発程など、一ヶ所も抜けるところがない」と指摘している。なお、日本の状況については、木場明志監修 『陰陽五行』 淡交社 一九九七に詳しい。
- 22) 孔子誕生(紀元前五五二)の折りの五人の老人(東の主・南の主・西の主・北の主・中央の主)は、5元素(木・青、火・赤、金属・白、水・黒、地・黄)の象徴と言われている。(フランツ・カール・エンドレス著 アンネマリー・シンメル編 畔上司訳 『数の神秘』 現代出版 九九頁)
- 23) 本間正義 「五色のタルチヨ」 『中沢茂油絵作品集 — ヒマラヤ五色(地・水・火・風・

- 空の祈り』 審美社 一九九七 三頁 参照
- 24) 奥村けい子 「Aspect of Mahakāfi Pyakhan」 『Dance and Music in South Asian Drama』
Academia Music Ltd. 一九八三 一六八頁
- 25) 金蘭姫 「韓国の獅子舞と中国の獅子舞の比較研究」 梨花女子大学大学院碩士学位請求論
文 一九九三学年度 一二頁
- 26) 馬場雄司 「獅子舞の系譜」 『アジアの祭りと芸能』 仮面と音楽 | 沖繩県立博物館
一九九一 一一三頁

発表を終えて

京都の春は、のんびりとした毎日であった。研究室では空想に明け暮れる反面、窓越しに夕日が見えるや、さっさと「仁左右衛門の湯」に出かけるのが、決まった日程になっていたからである。

それが、夏のある日、大阪の韓国大使館に行く阪急電車の中かで、「鳳山仮面劇」の上演に引き続くシンポジウムで何か発表するよう、千田稔先生に勧められてからは、急にあわただしくなった。

いよいよ秋になり、日頃訳していた日本演劇史に出てくる伎楽の獅子舞に目をつけ、その系譜をたどり、東アジアを中心にまとめたのが、この、いわば「五色獅子」である。

恩師の芳賀徹先生からは、比較文学比較文化の見本であるとはめられたが、たとえば先生の、「夜色楼台雪万家図」の腑分けに及ぶものとは、到底思えない。折よく、桂坂の楼台日文研にも、今夜は雪が降った。

ふる雪に 舞うやこの獅子 五色花

発表にあたっては、稲賀繁美先生、高橋裕一獅子博物館館長、篠原初江専門官に、並ならぬお世話になった。感謝の意を表す。

ミレニアムの2月8日

李 心 封

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A.トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウイーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Erinst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディア大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベP. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikolaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー。・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ・B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント(フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jurgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン=ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOH'ÁČKOV'Á 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ(ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトローブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客 員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) Willeam D. JHONSTON 「日本疾病史考—『微毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐって—」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H. W. KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科挙制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア(ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ=デリューシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性—西欧の俳句についての—考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

82	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」
84	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
89	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・日文研 客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に來日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリー ド国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準 教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家バ ークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・ゲーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・ 日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑭	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑯	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑰	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

⑪⑧	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニング コンサルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noel A. ROBERT 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑫	11.11.16 (1999)	ヴラディスラフ ニカノロヴィッチ グレグリヤード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑬	11.12.14 (1999)	楊 暁捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8 (2000)	李 応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14 (2000)	アンナ マリア トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRANHÄRDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11 (2000)	ペッカ コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9 (2000)	金 貞禮 (韓国・国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) KIM Jeong-Rye 「五・七・五、日本と韓国」
⑫⑩	12. 6.13 (2000)	ケネス・リチャード (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) Kenneth L. RICHARD 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11 (2000)	リュドミラ・ホロドヴィッチ (ブルガリア・ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) Lyudmila HOLODOVICH 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」

132	12. 9.12 (2000)	マーク・メリ (国際日本文化研究センター外来研究員) Mark MELI 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10 (2000)	リチャード・ルビンジャー (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Richard RUBINGER 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14 (2000)	辛 容泰 (韓国・東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) SHIN Yong-tae 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2001年2月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2001 国際日本文化研究センター

■ 日時
平成12年 9月12日 (火)
午後 2 時～ 4 時

■ 会場
国際交流基金 京都支部

東洋の文化の源流

東洋の文化の源流

東洋の文化の源流